



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

遺伝子の多様性と経済発展

著者	國枝 卓真
雑誌名	エコノフォーラム21 : 学生と教職員のインターコミュニケーション誌
号	25
ページ	45-45
発行年	2019-03-14
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027845

2018年
7月3日
火曜日

國枝 卓真 准教授（マクロ経済学）

遺伝子の多様性と経済発展

Thomas Lubikという経済学者がいる。この人が私の大学時代の友人に瓜二つで、顔から、話ぶり、身のこなし、まさにそっくりなのである。西洋人と東洋人が何故これほど似ているのか。

自然人類学にアフリカ単一起源説という学説がある。それによれば、現生人類は約20万年前に東アフリカで誕生し、そこから約6万年後、アフリカを飛び出した人類は、現在のイスラエルあたりから西のヨーロッパに向かうものとユーラシア大陸の東に向かうものとに分かれ、ユーラシア大陸の東に向かったものは、アリューシアン列島から北米大陸に渡り、南米大陸まで子孫から子孫へと何万年という旅をして世界に拡散していったと考えられている。Thomas Lubikと私の友人は何故瓜二つなのか。もしかしたら、アフリ

カを出たある集団がイスラエル辺りまで来て、そこで双子が生まれて成長し、兄は東へ弟は西へと別れていったのかもしれない。

さて、アフリカ単一起源説を応用して現代の国家間の所得格差を説明しようとした研究に、Quantrui AshrafとOded Galorのものがあ。世界には、一人当たりの年間所得が一千万円を超える国もあれば、十万円以下の国々もある。最近、研究者たちは、大昔に起きたことが現代の所得格差に大きな衝撃を与えているのではないかと考えるようになってきた。その文脈の中で、AshrafとGalorは人類の起源まで遡ってその格差を説明しようとした。

現生人類が誕生してアフリカで暮らしていた頃は、集団として保有する遺伝子は多様であったが、集団の中からある集団が他の地域に飛び出

す時に、元の集団が保有する遺伝子の種類より少ない種類の遺伝子が持ち出される。すると、アフリカからの距離が近いほうが集団の保有する遺伝子が多様で、アフリカから離れると集団の保有する遺伝子は同質的になる。実際に、遺伝子の多様性とアフリカからの距離には負の相関があることが確かめられている。

AshrafとGalorは、人類がアフリカから歩いた距離を遺伝子の同質性の代理変数として、遺伝子の多様性と一人当たりの年間所得の関係を分析した。彼らは、遺伝子の多様性が高すぎるか低すぎる場合には一人当たりの所得は低くなる一方で、遺伝子の多様性が中程度の場合は高くなるという結果を得た。遺伝子の多様性が高い地域は人類の故郷、アフリカ。この地域では、現在でも低所得や紛争に苦しんでいる。遺伝子が同

質的な地域は中南米で、ヨーロッパからの入植者の影響を考慮に入れたとしても、高所得にはなりにくいという結果を得ている。また、遺伝子の多様性が中程度の西ヨーロッパや日本、ヨーロッパから多くの入植者が定住して社会を形成した北アメリカなどは高所得になるとのことだ。

AshrafとGalorの研究は、一部の自然人類学者からは大変批判され、物議を醸し出した。物議を醸し出した理由は、歴史上の問題も大きく関わっていると思う。興味があれば、自然人類学者の批判とそれに対する彼らの返答を調べてみると勉強になる。

参考文献：

Ashraf, Q., Galor, O. (2013) The Out of Africa Hypothesis, Human Genetic Diversity, and Comparative Economic Development. *American Economic Review* 103(1), pp. 1-46.